宮城から、伝えたいこと。

Baton

つながれ、どこまでも

バトン
VOL.
08
FROM MIYAGI

特集

彩りを生みだす場所へ

きて・みて【特別編】

- □やまもと語りべの会（山元町）
- □一般社団法人 石巻震災伝承の会（石巻市）
- □SAY'S東松島（東松島市）
- □一般社団法人 ふらむ名取（名取市）

テーマ：
つながる・つなげていく

あしたのクリエイティブ 気仙沼市の「宮城芸術文化館」

バトンとは　世代や地域を越えて広く「伝える」、リレーのバトンのように「つなげていく」という意味を込めています。
県内外や幅広い世代の方々が復興・伝承に興味を持ち、被災地へ足を運んでいただくことを目的に発行しています。

特集

彩り生みだす場所へ

無心になり、こつこつと手を動かし続けることで
前に進むことができる――。
四季折々の花や、カラフルな毛糸が、
震災で傷ついた気持ちを癒し、力をくれました。
いま、地域に鮮やかな価値を生み出しているのは
あのとき生まれた
ささやかでも心が温まるような色彩です。

東日本大震災発災直後に広がっていたのは、色彩のない風景でした。津波をかぶった褐色の世界は、とても現実には思えず、目を背けたくなるくらい荒涼としたものでした。それでも、いつもと同じように季節は変わり、木々が萌えて春色の花が咲くと、こわばった感情が徐々に解きほぐされていったことを思い出します。

石巻市雄勝町では、家の跡地に植えられた、たった2つの花苗をきっかけとして、今ではオリーブの木々も生い茂る広大なガーデンができています。ここを故郷とする人たちがいつでも集い、癒しと交流をもたらす場所となっています。

気仙沼市では、2つの毛糸玉が被災し傷付いた人たちを元気づけました。ただ編むだけできれいな模様が出来上がる不思議な毛糸。編み物が初めての人も夢中になり、やがて地域に収入をもたらす産業へと成長しました。

育ったのは花だけではなく、できあがったのはニット製品だけではありませんでした。関わる人が増え、その輪が広がりながら、一つひとつが実を結んでいく喜びと達成感。13年という歳月の積み重ねは、新しい価値を育むプロセスでもありました。

ガーデンを中心に、人とつながり希望を紡ぐ

一般社団法人雄勝花物語
「雄勝ローズファクトリーガーデン」
徳水博志さん・利枝さん

2株の花から広大な花園へ

古くは「月の浦」と呼ばれた雄勝（おがつ）湾。深い入り江は美しい景観をなし、その奥に600世帯が暮らす雄勝のまちがありました。津波はその中心である平地まで達し、多くの方が犠牲となりました。徳水利枝さんの母親もその一人です。

「見渡す限り茶色の景色でした。せめて彩りがほしい、実家の跡に生の営みを感じられるような目印がほしい、そう思って6月にお店で見つけたホオズキとカワラナデシコを1株ずつ植えました」。

町内で学習塾を営んでいた利枝さん自身も被災し、震災直後は避難所や近隣の仮設住宅で中学生に勉強を教える日々を送っていました。そのかたわら、自宅があった場所に通って花の手入れを続けました。このささやかな行動が、住民たちによる復興プロジェクト「雄勝花物語」となり、今ではイングリッシュガーデンとオリーブ畑からなる広大な「雄勝ローズファクトリーガーデン」として、かつての被災地に新たな意味をもたらしています。

そのきっかけとなる様々な出会いがありました。発災の年の秋、「花の種を蒔かせて」と声をかけてきたのは千葉大学園芸学部の学生ボランティア。そこからランドスケープを専門とする同学部准教授（当時）の秋田典子さんとつながり、たった2株の花が花畑へ変わりました。翌2012年3月には株式会社泉緑化代表取締役の鎌田秀夫さんが委員長を務める「花と緑の力で3・11プロジェクトみやぎ委員会」との出会いがあり、取組の輪がさらに広がりました。利枝さんが当時を振り返ります。

「鎌田さんは塩害で弱った土壌を改良するためダンプ60台分の土とたい肥を入れてくださって。『種まきの日はカツサンドを100食用意する』とおっしゃるから、私は慌てて雄勝住民が住んでいた仮設住宅にチラシを配って参加者を募り（笑）当日は、地元住民や千葉大の学生さんたちを含む70人のボランティアが種まきに参加してくれました。そうして夏には実家跡地の530坪が一面の花畑になったんです。花畑の管理なんて私にできるだろうかと不安でしたが、その都度、手伝ってくれる方が現れ、できそうだと前向きになれる。今もその繰り返しです」。

〈上〉レンガの門から足を踏み入れると、園内は、雄勝町で造船された遣欧使節船「サン・ファン・バウティスタ」が寄港した町など、さまざまなイメージでデザインされています。〈下〉博志さんはハウス内で「北限のオリーブ」の株分けにもチャレンジ。ガーデン内で購入することもできます。

東北の地で探る可能性と希望

ガーデンは、亡くなった人や失くしたものとつながる慰霊の場、被災者と支援者が交流する癒しの場。関わる人が増え、地元の人たちが楽しそうに花を手入れしたり加工したりするのに触れた利枝さんは、花と緑をめぐる場と時間に価値を感じるようになりました。一方、雄勝小学校の教員だった博志さんは復興教育に力を入れるなか、人口が激減したまちの課題に触れざるを得ませんでした。

「町にあった事業所のほとんどが閉業あるいは撤退したので、働き口を求めて若者が雄勝を離れていきました。長い歴史と伝統文化を守ってきた雄勝を存続させるには若者が働ける場所を創出し、地産地消型の経済構造を作り上げることが重要だと考えていました」。

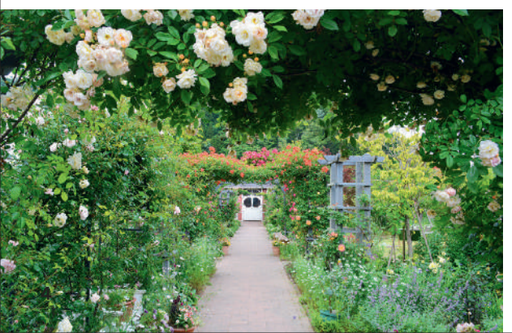
そこで博志さんが定年退職した2014年、二人の目標を具現化するため財政基盤を整えようと一般社団法人化（非営利型）に踏み切りました。事業の柱は支援部門（被災地緑化支援・被災地支援）、教育部門（防災教育・ボランティアの受け入れ）、事業部門（体験教室の開催）の3つ。観光バラ園プロジェクトを立ち上げる一方で、ハーブとオリーブの試験栽培をスタートさせました。2018年に復興道路の建設で隣地への移転を余儀なくされた際には、住民や支援者と一体となって新ガーデンの方向性について話し合い出来上がった構想の下、造成工事も一万株もの植物の移植もボランティアの力を借りて行いました。

5月から6月にかけて見頃のバラは約100種、300本。隣には、「北限のオリーブ」の畑があります。博志さんがこのオリーブについて話します。

「瀬戸内海の小豆島からもたらされたわずか15本の苗木から始まったオリーブ栽培は、現在120本にまで増え、潮風に揺れる風景は見事です。生育とオイル製造に関する技術支援を石巻市農林課から受け、2023年秋には480kgの実を収穫しました」。

オイルとなるのはそのわずか5パーセント。100mℓのボトルにすると240本です。そんな貴重なオリーブオイルは香りと味の良さから予約販売で売り切れてしまうほどの人気です。地元の高齢女性スタッフがオリーブの葉を加工して作るお茶も好評。わずか15本の苗木から始まったオリーブの栽培は、被災地の復興にとどまらず、産業の振興や交流人口の拡大にもつながり、「持続可能なまちづくりのストーリー」へと発展を遂げています。

バラが満開の時期には、ウェディングフォト撮影や結婚パーティーが開かれることも。



一般社団法人雄勝花物語「雄勝ローズファクトリーガーデン」代表理事の徳水利枝さんと夫で共同代表を務める博志さん。
背後にあるのは、スペインから移植した樹齢100年の老木「100年オリーブ」。

地域に幸せをうみだす〈器〉に

利枝さんはバラやハーブの栽培・加工と経理事務、博志さんはガーデン造成とパンフレットや掲示物の制作と役割分担をしつつも「被災地だからこの程度でよいと妥協せず、魅力あるガーデンにする」という志は一貫しています。それは支援してくれる人にとっても観光や震災伝承施設への来訪を目的に訪れる人にとっても魅力ある場になっています。植物の手入れは継続が重要。今も年間千人に上るボランティアの力は大きな支えです。合言葉は「人とつながり希望を紡ぐ」。ただ、最初から大きな目的や使命感を持っていたのではありません。

「キーパーソンやボランティア、石巻市農林課などの協力を得ながら歩き出したら、目の前に目標が次々見えてきた。希望は足元から生まれるんですね。大切なのはそれを育てていくこと。私たちは必要に応じて一つひとつスキルを身に着けてきました。花をいじったことのなかった妻がバラやハーブの栽培を、私は土木工事や助成金申請などお互いに初めてでしたが、今では苦なくできるようになりました」と博志さんは語ります。

支援者の善意や無償の行動によって誕生したガーデンは、常に無料開放。イベント会場としても利用できます。ガーデン主催のイベントとしては月1回開催する「晴れた日だけ歌う会」が好評です。コロナ禍を機にスタートしたこの屋外イベントを、高台移転した地元の方たちも楽しみにしています。利枝さんはこう言います。

「私を含めて地域の人たちは、『できる』こと、楽しいことを喜んでやりたい。周りの方たちが手伝ってくれるのも、私たちが気負いなくやっているからかも。私たちに足りない力をみなさんに補っていただくことで交流人口が増え、地域が回っているような気がします」。

現在、雄勝ローズファクトリーガーデンは地域全体の「ガーデンパーク事業」の中心を担っています。これは災害危険区域となったかつての町中心部の利活用を官民連携で進めるというもの。石巻市復興企画部および雄勝総合支所と協力しながら緑化活動を広く展開し、花と緑から新しい産業を生み出して復興まちづくりを推進していきます。

「この13年の体験の積み重ねによって、他者を癒すことで自分も癒されることを実感しています。私たちが行なっているのは地域に幸せを生みだすための〈器〉づくりです」。

常時無料開放されており、この地域出身の方が帰省の際に立ち寄ったり、震災後に別の場所へ引っ越した方が懐かしんで訪れたり、憩いと安らぎの場となっています。

〈右〉利枝さんは、園内で育った植物を加工したお茶やサシェ（匂い袋）をはじめ、付加価値を付けた加工品も人気と話します。「私が"森の妖精"と呼ぶ、地域のお母さんたちが手作りしていますよ」。
〈左〉博志さんは、園内の美しく積まれたレンガやブロックについて「鎌田さんが大量に置いていくので試行錯誤しながら形にしていますが（笑）。学生ボランティアも活躍してくれます」と話します。

DATA ◉宮城県石巻市雄勝町雄勝字味噌作34-2 ◷10:00～16:00 休火曜・年末年始 https://ogatsu-flowerstory.com/

こころを癒した「編み物」が人を呼ぶ懸け橋に

梅村マルティナ気仙沼FSアトリエ
株式会社代表取締役
梅村マルティナさん

迷いながら送った二玉の毛糸

JR気仙沼駅のすぐそばに、「梅村マルティナ気仙沼FSアトリエ駅前ショップ」があります。軒先の看板には、店名と共に「毛糸にふれればみんなしあわせ」の文字。さわやかな水色のドアを開けると、店内には色とりどりの毛糸やニット製品が並んでいます。「こんにちは。気仙沼の梅村マルティナです」。そう言って笑顔で迎えてくれたのは、ドイツ出身のマルティナさん。「いつも自己紹介する時は、名前の前に『気仙沼の』と付けるんです。もう10年以上も住んだり通ったりしているので、大好きなまちですし、たくさんの人に気仙沼を知ってほしいと思っています」。

マルティナさんが気仙沼と縁を持ったきっかけは、東日本大震災でした。当時、京都でドイツ語講師をしていたマルティナさんは、テレビに映る被災地のニュースに心を痛め、「私に何かできないか」

KFSショップに設置されたゼブラは気仙沼のシンボルアニマルに育ち、10年ほどで市内各地に17体が点在。ゼブラをめぐるフォトラリーイベントも誕生し、観光客の楽しみにつながっています。

「編み物しながらでもいいですか。気持ちが落ち着くので」と、靴下を編みながら気仙沼との出会いを振り返るマルティナさん。

と思案。考え抜いた結果、自身の趣味だった「編み物」の道具を送ることに決めました。「編み物で指を動かすと、気持ちが落ち着きます。無心にもなれます。その間は、つらいことも少しは忘れられるかもしれないなと。みんなが同じ気持ちにはならないかもしれないけれど、1人でも気持ちが安らげばと思ったんですね」。

マルティナさんはすぐに、毛糸・編み針・編み方の説明書をセットしたものを用意。2011年4月に、京都のNPO法人を通じて東北各地の避難所へ届けられました。すると翌月、気仙沼市の小原木（こはらぎ）中学校避難所からマルティナさんに電話がかかってきたのです。『もっと毛糸を送ってもらえませんか』って。その声を聞いた時のうれしさは、一生忘れないと思います」と、涙ぐみながら振り返るマルティナさん。

「それからしばらく経つと、小原木中学校避難所から写真も送られてきました。皆さんが編み物をする様子や作ったものが写っていて、それを見た瞬間、毛糸で心がつながったと感じました。その時に私の主人が『皆さんに会いたいでしょう？』と。家族で気仙沼に行こうと言ってくれたんです」。

「タコちゃん」が再生のシンボルに

マルティナさんが初めて気仙沼を訪れたのは、2011年6月のこと。京都から気仙沼へ向かう道中では「避難所で私が泣いてはいけない」と気を引き締めていましたが、実際に小原木中学校避難所の皆さんに会うと「泣く気持ちにはならなかった」と話します。

「なぜかというと、みんなが周りの人と協力しながら頑張ってたんですよね。新たなスタートを切るような前を向く雰囲気があって、私も一緒に頑張ろうという気持ちにさせられました」。

マルティナさんは寝袋を持参して同避難所に滞在し、2日間にわたって編み物教室を開催。10名以上が参加し、一緒に靴下を編み上げました。

避難所で編み物を楽しむ人がいる一方で、編み物を難しく思う人も多いと現地で実感したマルティナさん。同年7月に再び小原木中学校避難所を訪問した時には、「誰もが毛糸で簡単に作れるもの」を提案します。そこで誕生したのが「小原木タコちゃん」です。

「このタコちゃんは、三つ編みだけで作れるんですよ。タコは海の生き物だし、8本の足でたくさんの幸せをつかめます。しかもタコの足は、ちぎれてもまた生えてくるといわれます。海のまち・気仙沼の『復興のシンボル』にぴったりだと、避難所の皆さんも言ってくれました」。

避難所で作られたタコちゃんはマルティナさんが京都に連れて帰り、毎月15日に知恩寺で開かれる「百万遍さんの手づくり市」などで販売。その売り上げが制作者の収入につながるだけでなく、被災地を支えたいと願う全国の人々をつなぎました。

女性に魅力ある仕事場づくりを

こうしてマルティナさんが気仙沼の人々と交流を深める中で、地域の女性たちから「仕事がない」という声を聞くようになります。タコちゃんプロジェクトは小原木中学校避難所から気仙沼市内へと広がりましたが、制作者が得られる稼ぎはお小遣い程度。もっと安定した収入につながる仕事や女性が働きやすい職場を創出するため、マルティナさんは毛糸やニットを製造・販売する会社を立ち上げることにしました。

2012年3月、「梅村マルティナ気仙沼FSアトリエ株式会社」を設立。2013年1月には気仙沼市唐桑の大沢地区にアトリエを開設し（のちに大沢地区のかさ上げ工事により、面瀬地区に移転）、2014年5月には気仙沼駅前にショップもオープンさせました。マルティナさんは会社設立にあたり、住民票を京都市から気仙沼市へ異動。それは彼女にとって、「当たり前のこと」だったと語ります。

「心はいつも気仙沼にありますと、わかりやすく伝えられますから。しかも気仙沼に住民票を移せば、私が働いて支払う税金は気仙沼に入ります。復興にお金が必要な気仙沼に、税金を納めたかったんです」。

世界で人気のオパール毛糸を製造するドイツ・TUTTO社に、KFSオリジナルの毛糸を特注。毛糸の帯に「気仙沼」と入れ、まちの名も国内外にアピール。

気仙沼の人たちと一緒に頑張りたい、気仙沼のまちと一緒に成長したい。その強い想いが、マルティナさんを初めての起業へと突き動かしました。

観光客が訪れる「編み物の聖地」に

社名に含まれるアルファベット「FS」は、ドイツ語の「Friedenssocken（平和の靴下）」から。そこに気仙沼のKを加えて「KFS」と掲げたアトリエやショップは、地域の女性たちが編み物を楽しみながらいきいきと働ける職場になりました。さらに編み物を通じて気仙沼をもっと広く知ってもらおうと、気仙沼の自然や文化をイメージしたオリジナルの毛糸「気仙沼シリーズ」も開発。「全国の方がショップやイベントなどでこの毛糸を見た時に、『気仙沼、元気にがんばってるね！』と思ってもらえたらうれしいです」と、マルティナさんは微笑みます。

KFSの評判は少しずつ全国に拡大し、創業から10周年を迎える頃には〝編み物好きの聖地〟と称されるまでに。日本各地から気仙沼へと、遠路はるばる足を運ぶ人も増えました。「気仙沼駅前のショップで買い物をした後、気仙沼を観光して、おいしいものを食べて。KFSをきっかけに気仙沼の魅力を多くの人に知ってもらい、いずれは若い人が都会から移り住んでくるようなまちになってほしいですね。そのためにも『ここで働きたい』と思ってもらえる魅力的な仕事場を作っていきたいです」。今や気仙沼は震災復興を経て、地方創生のフェーズへ。マルティナさんは未来の気仙沼に希望をつなごうと、〝しあわせを編む仲間〟の輪を広げています。

〈上〉避難所で生まれた「小原木タコちゃん」は、大きさや色もさまざま。目や口に使われているボタンは、全国からの支援で集まりました。〈下〉東日本大震災の直後に、避難所へ送った毛糸セット。日本語が書けなかったマルティナさんに代わり、当時10歳・12歳の息子さんたちが編み方の説明書を手書きで用意しました。

DATA ◎気仙沼市古町3-2-41（JR気仙沼駅すぐ前）☎0226-25-9321 ◷火曜～土曜 10:00～17:00 休日曜・月曜・祝日 https://www.kfsatelier.co.jp

Vol.8

きてみて 特別編

各地で続けられている追悼の機会や、東日本大震災の教訓を未来に伝えていく取組みを紹介します。

「やまもと語りべの会」会長の渡邊修次さんは地元で生まれ育ち、震災当時は校長会会長として教育現場の支援にも当たった。

in 山元町 やまもと語りべの会

震災時の支援に感謝する気持ちから始まった「黄色いハンカチ」プロジェクト。来町者の思いのこもったメッセージがはためく。

「地震があったら津波の用心」。2つの三陸地震津波を伝える石碑は人目につかない場所にあったが、震災後に中浜小学校校庭に移設。

津波によって折れ曲がった時計台。津波の威力の恐ろしさがうかがえる。

震災後、ボランティアとして山元町に通った杉山朝子さん。現在は千葉から移住し、語りべ大使として活動している。

津波は防風林の松などを巻き込みながら校舎を突き抜け、2階天井まで達した。

町内外からも参加し語り継ぐ山元の記憶

やまもと語りべの会は2013年11月に発足しました。現在の拠点は山元町の旧中浜小学校校舎。ここは、高さ約10メートルの津波に襲われましたが、屋上に避難した児童や教職員、地域住民等約90名が無事救助された場所です。

会長の渡邊修次さんは当時、この近くにあり避難所にもなった山下中学校の校長でした。「あのとき何が起きて誰がどう行動したのか、どう判断したのか。実体験や当時の記憶を集め、地元の文化や歴史も含めて伝えていかなければと、この会を始めました」。

会ではガイド研修会を開く一方で、常に最新情報を盛り込んだ地図を更新しながら、被災の記憶を伝え、防災意識を高めるための見学コースを案内しています。2015年頃からは修学旅行の訪問も増加しています。

「どこでもそうだと思いますが、語り部の高齢化が進んでいます。それだけに中高校生など若い人が研修会に参加しているのは心強いですね。また、ボランティアで訪れたのをきっかけに仲間に入ってくれた方もいます。そうした町内外に住む「やまもと語りべ大使」が各自の視点で案内するコースもあります」。

最近気になるのは、中浜小だけを短時間で見て帰途に着く人が多いこと。「犠牲者が出た場所、復興工事による土地のかさ上げなど、現場に立たなければ実感できないことがあります。ぜひ町を周遊しての見学をお勧めします」。

DATA 山元町震災遺構 中浜小学校 ◉宮城県亘理郡山元町坂元久根22-2 https://yamamoto-kataribe311.jimdofree.com/

一般社団法人石巻震災伝承の会代表理事の大須武則さん。石巻観光協会と石巻震災遺構指定管理グループを構成し、代表を務める。

in 石巻市 一般社団法人 石巻震災伝承の会

段ボールベッドの組み立て体験の様子。このベッドは5トンの重さに耐えられる。ブルーシートを敷いた床とベッドの寝心地を比べることができる。

門脇小学校本校舎は津波にのまれ、火災にも見舞われたが、校長室の金庫に保管されていた卒業証書は無事だった。

パネルの中には様々なデータをまとめたものがあり、注目は津波の高さと浸水高の違い。その威力を再認識できる。

疑似体験型防災学習「ツナミリアル」の記入シート。効率よく防災学習ができるプログラムが多彩に準備されている。

被災した様々な方の証言や映像資料を見ながら震災を疑似体験できる。

想像力と体を使ってリアルな疑似体験学習

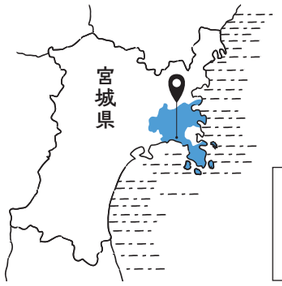
震災遺構指定管理グループは震災遺構門脇小学校および震災遺構大川小学校を管理運営しています。門脇小学校では、解説ガイドや語り部のあっせん、防災教育に力を入れています。解説ガイドをする際は、来館者が暮らす地域に合わせた補足を心掛けています。

代表理事の大須武則さんは震災発生時、市内の三陸河北新報社編集部長でした。社屋は停電し1階が浸水。製作システムに被害を受けながらも2日後に新聞発行を再開しました。その一方で、社屋を周辺住民に数週間にわたり、避難所として開放していました。

その後、会社の業務として復興に向けた情報交換の場づくりや震災を正しく伝えるテキスト作りなどに取り組みました。定年退職後は自ら伝承活動をしています。

「伝える立場で仕事をしてきたので、伝えることで恩に報いたい。避難はもちろん、助かった後にいかに心身の健康を維持するか、それを伝えることも大切です」。

会としては、東北大学災害科学国際研究所の佐藤翔輔准教授の監修のもと30分間の疑似体験防災学習「ツナミリアル」を開発しました。語り部の体験を聞き、その前にイメージした危機や対策とのギャップを知ることで、自分ごととして防災・減災を考える内容です。ツナミリアルは「新聞社デスク編」「小学校教諭編」「小学生編」「会社員編」「主婦編」「工場経営者編」があります。



DATA 石巻市震災遺構門脇小学校 ◉宮城県石巻市門脇町4-3-15 https://www.facebook.com/ishinomakidensyou

『閖上だより』の編集長も務めるふらむ名取代表理事の格井直光さん。閖上の今を伝え続けている。

in 名取市　一般社団法人 ふらむ名取

震災7か月後から始動した『閖上復興だより』は60号を発行。現在は『閖上だより』として地元住民に向けて年4回発行している。

国内外から訪れる様々な方に向けて活動を行っている。この日は韓国からの団体客が訪れ、格井さんの体験に熱心に耳を傾けていた。

『閖上だより』の他、写真集や記念誌など、閖上の震災前と直後、そして今を詳しく知ることができる。

震災半年後から定期的に行われている『いも煮会』。地域の交流の場として積極的に活動を行っている。

年末恒例の『餅つき会』の様子。他にも『茶話会』が災害公営住宅にて開かれている。

地域情報を発信しつつ住民同士を結びつける

「ふらむ」はノルウェー語で「前進」の意。19世紀末、北極海の氷に閉じ込められながら自力脱出した木造探検船「フラム号」のように、前に進もうという希望を込めた名称です。

代表理事の格井直光さんのかつての自宅は津波の被害が大きかった閖上にあり、ご両親も犠牲となりました。震災直後からふるさとの状況を伝える新聞「閖上復興だより」を発行し、それは現在も「閖上だより」として継続しています。団体の活動は新聞発行とコミュニティ再生の支援、そして団体の前身の「ゆりあげ震災を伝える会」時代から続いている語り部活動の3本柱となっています。

「名取市震災復興伝承館を訪れるのは他の伝承施設も併せて見学する方がほとんどなので、仙台市の震災遺構荒浜小学校やせんだい3・11メモリアル交流館、石巻市震災遺構大川小学校、山元町の震災遺構中浜小学校などと組み合わせたコースもご案内します」と格井さん。

高台移転ではなく現地再建を選んだ閖上地区では、まちびらきまで8年を要したため、その間に閖上を離れた住民も多くいました。そこで災害公営住宅の入居者が新たな関係性を結び合うために町内会結成から支援をし、定期的に茶話会などを催しています。

「2012年から続ける秋のいも煮会、年末年始の餅つき会は定例行事になりました。毎年たくさんの方たちが参加してくださるのも復興の1つの形かもしれません」。

DATA 名取市市民活動 支援センター ◉宮城県名取市大手町5-6-1 https://www.framnatori.com/

以前はバスガイドをしていた経験があるSAY'S東松島代表の山縣嘉恵さん。明快でわかりやすいお話は聞く人を惹きつける。

in 東松島市　SAY'S 東松島

東松島市東日本大震災復興祈念公園にある慰霊碑には、野蒜地区で亡くなられた方たちの名前が刻まれている。

活動拠点でもある東松島市震災復興伝承館は旧野蒜駅舎。野蒜海岸から700mの場所で避難した人たちは2階に上がって難を逃れた。

3月11日に多くの命を救った「お佐藤山」。東日本震災以前から佐藤善文さんが私財を投じて整備した避難所。

音楽による伝承活動の様子。山縣さんがモットーとしているのは「楽しく防災を知ること」。

エコランタンづくりのレクチャーも活動のひとつ。災害イベント以外でもワークショップを行っている。

歌で楽しく防災学習 伝承の場づくりも

「野蒜では住民約4700人のうち516人が犠牲になりました。みんなで助かりたかったという思いが私たちの活動の原点です」と代表の山縣嘉恵さん。一番に考えたのは、震災をなかったことにせず、伝え続けて防災を考えていくこと。「それが亡くなった人たちや誠心誠意支援してくださった人たちへの恩返しだと感じています」。

活動は自らの体験を語り遺構を案内するだけでなく、防災教育など多岐にわたります。東松島市震災復興伝承館で開催する「公開語り部ガイド」は、誰でも「話をする側」になれる場。さまざまなイベントとコラボした「エコランタン作り」では楽しみながら災害への備えが身に付きます。

伝承・防災教育の柱となる歌「もし地震がおこったらね」は、山縣さんが東日本大震災とスマトラ島沖地震の被災者が交流するJICA（国際協力機構）支援の事業に参加したことで生まれました。この時に訪れた町バンダ・アチェでは、古くからある災害伝承の歌が人々の避難行動に繋がり多くの命が助かりました。その事実をもとにして、生まれたのがこの歌です。

「防災を支えるのは日常の行動です。日本でも歌で子どもに防災意識を伝えようと思いました。頭を守る、高台に逃げるという基本的な避難行動を歌詞に盛り込んでいます」。

SAY,S東松島のメンバーは少人数。災害に備えるきっかけづくりと実践に、柔軟に取り組んでいます。

DATA 東松島市震災復興伝承館/東日本大震災復興祈念公園 ◉宮城県東松島市野蒜字北余景56-36 https://mookspr.com/（MOOKSで防災情報の発信をしています）

あしたのクリエイティブ

vol.08

気仙沼市の『宮城芸術文化館』

左側の壁に掲げられているのはティニさんが気仙沼の海と建物からインスピレーションを得て描いた壁画「天地創造」。

DATA 宮城県気仙沼市南郷14-3 ☎0226-25-8966／090-6534-1077（館長携帯）10:00~17:00 休不定休 ¥300円（高校生以下200円）

国際的な美術家が手がけるギャラリー

ドイツ生まれのティニさんは、ヨーロッパの製本文化を受け継ぐ製本・装幀のアーティスト。羊皮紙などを用いて50もの工程と3～6か月の時間を費やし、技巧を凝らしたオリジナルの「本」を作りあげます。これまで東京、ニューヨーク、サンタフェ、ロサンゼルスにアトリエを据え、世界各地で40回の展覧会を開催。ヨーロッパ各王室の公式文書やノーベル賞の賞状の制作も手掛け、1960年代に物理学賞を受賞した朝永振一郎と文学賞を受賞した川端康成の賞状も制作しました。

登米市出身の永年さんは、伝統的なマーブルペーパー（大理石模様の装飾紙）の作家にして美術収集家。二人が長い欧米生活のなかで集めたミュシャやロートレックなど19世紀末のポスター群は、宮城県美術館や川崎市民ミュージアムに「三浦コレクション」として700点が収蔵され、公の財産となっています。

そんなご夫妻の拠点「宮城芸術文化館」があるのは気仙沼市の大川沿いにある住宅地。2017年に登米市に開館したのち新たな活動の場を求め、2023年9月に移転しました。お二人の作品やコレクション、永年さんの兄・功大さん（世界的写真家）によるジャズミュージシャンの写真を展示しています。

永年さんのマーブルペーパー作品は購入可能なものもある。

ティニさんが手がけた製本装幀本の数々。色と素材の細やかな重なりは圧巻。

1968年に川端康成がノーベル文学賞を受賞した際の賞状（レプリカ）。

ルイ・アームストロング、ビル・エヴァンスなど、1960年代から三浦功大さんが撮りためたジャズミュージシャンの写真も。

アートを通して地域に貢献を

移住の決め手となったのは気仙沼が三浦さんの父の故郷であること、そしてドイツの港町キールで生まれたティニさんの「海の見えるまちで暮らしたい」という希望を叶えたかったこと。物件を探した末にかつて材木倉庫だったこの建物と出会いました。ここは、震災後からしばらくの間、キリスト教系の支援団体の拠点として活用されていたもので、当時は教会としての機能も併せ持っていました。現在、壁面には、ティニさんが気仙沼の海と建物からインスピレーションを得て描き上げた長さ11mの壁画「天地創造」が掲げられています。

三浦さんは、「震災による痛みを体験し向き合ってきたからか、気仙沼の方たちは感受性が豊かに思えます。芸術文化を受け入れる風土もあって、ここのオープニングセレモニーの時には、たくさんの市民の方たちが歓迎してくださいました。芸術が人々の心に訴える力を実感しています」と語ります。

「宮城芸術文化館」の特徴は、アートを通して人々が集う場でも提供すること。天井まで5mに及ぶギャラリーは音響がよく、クラシックやジャズのコンサートも開催しています。口コミが広がり、自らコンサートを開きたいという地域住民の方々の持ち込み企画も増えているそうです。

みんなが集い、豊かな時間を共有できる拠点に

ギャラリーに隣接するアトリエでは、お二人が制作に専心できる環境も整いました。今後は、マーブルペーパーの秘蔵品の公開やそのデザインの提供を積極的に行うほか、所有するコレクションの展示や子どもを対象としたワークショップ開催なども計画しており、ギャラリーを拠点とした文化芸術活動の広がりが期待されます。

オリンピックイヤーに当たる今年は、二百数十点もの歴代オリンピックの公式ポスターの企画展示をする予定とのこと。多様な芸術が融合した場としてみんなが集い、精神的な豊かさを享受できるような拠点になればと三浦さん夫妻は願っています。最近は功大さんの写真を目的に全国から足を運ぶ人も少なくありません。また、館内には彫刻界の第一人者・勝野眞言（かつのまこと）さんの作品10点が展示されています。

「私たちがメッセージを発するというよりは、来館したみなさんから受ける力の方が大きく、重要です。作品や情報は何でもオープンにしていきたいので、1人でも多くの方に足を運んでもらって、アートに触れる場にできたら。そこはぶれずにやっていきます」。

震災時、支援の拠点だった場所が現在では芸術文化で人の心を癒す場となっていることは、建物の不思議な縁を感じずにはいられません。

ティニ・ミウラさんは1940年、ドイツ・キール生まれ。製本家・装幀家。パリのエコール・エスティエンヌ美術大学で学び、1975年にスウェーデン政府から芸術家マイスターの称号を受ける。米国製本装幀大学教授。

三浦永年さんは1944年、宮城県登米市生まれ。マーブルペーパー作家・収集家。宮城芸術文化館館長。早稲田大学政経学部卒業後、ロンドン大学大学院に学ぶ。米国製本装幀大学教授。

ティニさん作のグラフィックや山羊皮の小物の販売も。

太陽のバトン

大津波の翌日、屋上で手を振る子どもたち。
それに気づいた自衛隊のヘリコプターは、
この場所に着陸。
津波から逃れ、
校舎の屋上で身を寄せ合い一晩を過ごした人々を
全員救助しました。
太陽の光でできる影は、時刻とあわせて、
大地震が起きた世界各国の方角を差します。
地球を見つめ続けてきた太陽が、
過去の災害を忘れるなと、静かに伝えます。

山元町震災遺構 中浜小学校　震災モニュメント「3月11日の日時計」

INFORMATION

3.11みやぎ語り部講話

みやぎ東日本大震災津波伝承館にて
毎週土曜日
11:00～12:00、13:30～14:30に開催中

※講話者等、詳しくはQRコードのウェブサイトをご確認ください。※午前のみ開催の日がありますので、事前にQRコードのウェブサイトでご確認ください。

○入場無料　○事前予約不要

第2回みやぎ災害伝承ポスターコンクール最優秀賞作品を紹介します！

昨年実施した本コンクールの
受賞作品が決定しました。
詳しくは、県ウェブサイトをご確認下さい。

小学校の部
丸森町立舘矢間小学校
6年 冨田 めぐる さん

中学校の部
大和町立宮床中学校
2年 関 綾香 さん

高校の部
宮城県宮城野高等学校
2年 小野 梨々子 さん

SNS「いまを発信！復興みやぎ」

宮城の復興の「いま」を
SNSでお伝えしています！
皆さまからの投稿も
お待ちしております！

LINE　Facebook　X（旧twitter）　Instagram

Baton　発行元　宮城県震災復興本部（事務局：復興支援・伝承課）
〒980-8570宮城県仙台市青葉区本町三丁目8番1号　TEL：022-211-2443

宮城県 Miyagi Prefectural Government　むすびえ